

## 聖書に学ぶ —— 病と癒し ——

佐久間 勤

聖書は、古典、人類の遺産、文化的な遺産です。長い年月を経て伝承されてきた文学作品です。今回、そのような聖書から知恵を学ぶということをテーマにしてお話したいのですが、わたし自身最近入院・手術を経験したこともあり、「病と癒し」ということに焦点を当ててみようと思います。

### 1 古代の病気

病気というものは大昔から、おそらく人類の始めから、私たちの生活にいつも伴っていたもので、古代の人も私たちと同じように病に悩んでいたと思われます。そういうことから、現代の私たちへの橋渡しとして、聖書の中で、病と癒しについてどのようなことが書かれているのか、そしてそれに何か私たちのヒントになるようなことがあるのかどうか、見ていただきたいと思います。

といっても、聖書が書かれた時代は今とは隔たりの大きい時代です。旧約聖書について言えば、その古い層は紀元前 1000 年ころに遡ると考えられます。新約聖書でも紀元 1 世紀に書かれ、2000 年近い時代の隔たりがあります。聖書が書かれた当時の病気に関する知識は、現代の医学の知識とはまったく無縁な世界ですので、聖書に病気として出て来るものが、果して現代の病気のどれに当るのか、正確なところはよく分からないことが多くあります。

古代の人を診察するわけにはいきませんから、古代人がどんな病に罹っていたのかを直接知ることは困難ですが、ここで『古代オリエント

の生活』(河出書房新社刊)をご紹介しますと思います。エジプト学の研究者でもあられる三笠宮殿下の責任編集という形で出された本で、その中に、病気のことも紹介されています。

古代の文明は、エジプトと、それからメソポタミアと言われる地域とに二大文明があり、聖書の世界、現在のパレスチナ地域は、その二つの文化圏の間に挟まれた周縁地域でした。聖書の世界を証言する考古学的遺物や古文書は、聖書を除けば、ほとんど無い状態で、聖書の世界の人々がどのような生活をしていたのかを詳しく知ることのできる手段は非常に限られています。その代わりに、エジプトとかメソポタミアでは多くの書かれたものが残っていますので、それが古代の世界がどんなものだったかを想像するのに手がかりになります。と言っても、先ほど申しましたように、現代とは医学がまったく違いますので、そこに出て来る病名を翻訳するのも困難です。

ただ、考古学の技術によりミイラの解剖ができるようになりました。皆さんもテレビなどで御覧になったかもしれませんね。ツタンカーメンが暗殺されたのか、あるいは事故死だったのか、と、よく話題になりますが、そのミイラの解剖で、どんな病気にかかっていたのか、ということが分かるんですね。

先ほどご紹介した『古代オリエントの生活』に掲載されている病名を見てみますと、現代の私たちの病気とほとんど変わらないですね。骨折や外傷は言うまでも無く、肺炎や、胸膜炎や、腎臓結石、肝硬変、中耳炎。虫歯もあります。通風とか糖尿病、動脈硬化など、現代人にとっても何か身につつまされるような病気もあります。

これらの病は、ミイラにしてもらえるような高貴な人の病であって、一般の人々がどうだったというのは分からないのですが、それでも、古代の人も現代の我々とあまり変わらない病気に苦しんでいたということがわかりました。人類の歴史はまさしく病気の歴史です。

ミイラの解剖からもう一つわかりますのは死亡時の年齢で、平均が36歳だったということです。これはまた別の統計から、古代ローマ時代の紀元前後、今から2000年くらい前の平均年齢も、だいたい30歳と言われています。人類の長い歴史の中で、平均年齢が30代半ば、という時代が長く続いてきたのですね。今私たちの平均が80歳くらいですから、ず

いぶん違う世界に生きています。それだけ医療、治療の技術が進んできた、衛生の環境がよくなった、ということが言えると思いますが、そのように環境が変わり、医者能力が高くなったとしても、それでも病気に苦しむ現実は一向に変わらないわけですね。

もう少し『古代オリエントの生活』から引用してみますと、薬というものも非常に古い時代から使われています。エジプトの壁画などを見ますと、目の回りに黒く色が塗られています。これは目を病気から守るためのもので、単なるお化粧ではないんですね。それに、孔雀石とか方鉛鉱とか、毒性のある薬を使っていたようです。

外科手術も行われていました。聖書に出てくる「割礼」は、ユダヤ教ではすべての男子は皆割礼を受けなければならない、と定められているのですが、実は文字が使われるようになる以前の太古の時代から割礼は行なわれていましたし、そのための手術道具も使われていました。そしてメソポタミアでは、外科医のことは、青銅器の刃物で切る者、そういう技術を持っている者、というふうに呼ばれていました。

これはエジプトの例ですが、紀元前 2000 年頃の第四王朝時代に、もう歯に穴が人工的に開けられているミイラの解剖で見つかっています。ですから、歯の手術も行なわれていたようです。

やはりエジプトの文献によりますと、古代から、医者は専門医に分かれていたようです。歯医者もいれば、骨を接ぐ医者もいるというように、専門の分野に分かれていて、どういうふうに治療するかというのも全部決まっていたんですね。当時は、無料診療です。

また、薬効空しく患者が死亡するということが起こりましたが、そのような時に医者は医療責任を追及されました。ただし、伝統の、伝えられた処方に従って治療した場合には、医者は責任を問われない。言い伝えられた処方に従わないで勝手に治療した場合には、医者に責任が問われる。そのようなシステムになっていたようです。

その治療法も書物で残っていますが、決して呪術や魔術で治療していたわけではなく、かなり合理的な治療をしています。このように見えますと、私たちの病の経験と、古代の人々の経験と、全然違う世界とは言えないかも知れませんね。

## 2 聖書に登場する病気

では、もう少し聖書の方に近づいて参りましょう。聖書に登場する病気にはどんなものがあるのでしょうか。聖書は医学の教科書ではありませんので、聖書に出てくる病気の名称がそのまま医学的な病名と対応するとは限りません。

「中風」と翻訳されている病気や、手が萎えている、足に障害がある、口がきけない、目が見えない、耳が聞こえない、そのような身体の障害も出て参ります。それから、「てんかん」と訳されている病気もあります。これは意識がなくなってしまって、急に暴れだす、口から泡を吹く、転げまわる、そのようなことが伝えられています。しかしそれが医学で言われる「てんかん」という病気なのかどうか断言はできません。それから性病、性器の病気も幾つか伝えられています。現代の私たちによく分からないのは、「悪霊に憑かれている」と言われる病状です。自分で体に傷をつけたり、大声で叫んだり、鎖で縛ってもその鎖を引きちぎるほどの怪力が出るなど、普通の人間とは違う状態になっている心身の状態が生じたとき、その原因を悪霊や悪魔に求めています。しかしそれがいわゆる精神の病なのかどうか、軽率に断言することは慎むべきだと思います。

聖書で「重い皮膚病」と翻訳されている病気があります。原語のヘブライ語は〈ツァーラト〉という言葉なのですが、以前の翻訳では「ハンセン病」に当たる病名を使っていました。しかし旧約聖書の記述を見ますと、明らかにそれとは違う病気です。『レビ記』13～14章に、「重い皮膚病」に関する規定が集められていますが、それを見ますと、一種の皮膚病で、皮膚に変色が生じ、やがて治癒することもある、という病気です。宗教的・祭儀的な清さというのを失わせるので、この病気にかかった人は共同体から排除されます。衣服にも馬具などの革製品にも生じ、家の壁にも生じる病気です、それらは焼き尽くして根絶することとされています。ヒトの場合、治癒したら祭司に見せて確認してもらってから、感謝の供え物をして、元の生活に戻ることになっています。明らかに「ハンセン病」とは異なります。「ハンセン病」がユダヤ・パレスチナで発生するようになったのは新約時代の直前であったようです。イエスが「重

い皮膚病」に苦しんでいる人々を癒したという、福音書に出て来る物語はハンセン病に苦しむ患者の人々のことを指しているようです。

翻訳された言葉と原語との意味の違いをいつも考えておかなければならないのは「重い皮膚病」に限ったことではありません。もう一つの例を上げますと、サムエル記上 25 章 37 節に出てくる、心臓、原語で〈レーブ〉という言葉です。後に王となるダビデがまだ野武士の頭領でしかなかった時に、敵対するサウル王の手から逃れて、ナバルという村の金持ちのところに一時避難しようとしたことがありました。その時にナバルは身分の定かでないダビデを拒絶したのですが、ナバルの妻はダビデが将来王となる大人物だと見抜き、夫の無礼を詫び、ダビデがナバルに報復するのを思いとどまらせます。後からそれを知ったナバルは恐怖のあまり「彼の心臓〈レーブ〉は腹の中で石のようになった」と物語られています。〈レーブ〉が心臓だとすれば、心筋梗塞のような症状に見舞われたことになります。しかし物語によりますと、ナバルは、その後十日間生きのびてから死んだということです。心筋梗塞だとほとんど即死でしょうから、新しい翻訳では〈レーブ〉が腹の中で固まって石のようになったというのを、「彼は意識を失って石のようになった」と訳します。このように〈レーブ〉を機械的に心臓に置き換えて翻訳できないのです。

その他にも、〈ネフェシュ〉というヘブライ語の単語は「魂」と翻訳されますが、この翻訳は誤解を生む危険があります。「魂」は人間の身体の中に籠もっている目に見えない「生命力」のようなもので、身体から分離して現れる幽霊や「ひとだま」を連想しがちな言葉です。しかしヘブライ語〈ネフェシュ〉の基本となる意味は「喉」です。詩編などで賛美への呼びかけの定型句として、「私の魂よ主を賛美せよ」というものがありますが、これはむしろ「私の喉よ、主を賛美せよ」、つまり「さあ私は、主に向かって賛美の歌を歌おう」と翻訳するのが詩編の意味にふさわしいのです。

そのように、原典の言葉を現代の言葉に移し変えるとき、箇所ごとにさまざまな違う言葉に置き換えないと正しい翻訳にならないという難しさがあります。ですから、「重い皮膚病」に限らず聖書に登場する病気に関しても、それが現代の医学の言う病名とどう対応するのかはそれほど明らかではないということを忘れてはなりません。

とは言え、病気というものが、人間の、あるいは人類の、歴史のはじめから私たちと共にあった最も親しい友——あんまりありがたくない友——ですので、この友に関して聖書はどのように見ているかを、次にお話ししたいと思います。

### 3 聖書における癒し

日常体験されるものとしての病気は、直感的な表現を使えば、本来あるべき状態ではない、正常ではない状態です。それは世界とそこの中にあるものには、本来そうあるべき理想的状態があるという暗黙の期待のような意識があることを意味しています。古代の人は私たち以上に、世界が秩序だったもの、形の整ったものであることを意識していました。「宇宙」とか「コスモス」というギリシャ的概念がそれを雄弁に物語っています。ギリシャ神話でも黄金の時代、銀の時代、青銅の時代という区分がなされますが、それによって言い表されているのは、本来の姿をもつ理想的な時代が初めにあって、それが黄金の時代であり、時が経過するにつれて、その理想的なあり方が次第に崩れて現代に至っていると考えられる世界観です。現実には体験される世界は決して理想的なコスモスではありませんから、「病んでいる世界」と言うこともできるでしょう。

このような理想のあり方についての考え方は聖書にも見られます。七日間の創造の物語（創世1章）や楽園の人間の創造の物語（創世2章）が描き出すのは、ものごとの初めの時の理想的な状態です。そこでは人間と世界に初めに与えられた秩序が支配していて、暴力や流血といった対立や無秩序を意味するできごとは全く姿を現しません。しかし、創造の時の秩序だった平和な世界が、やがて傷つき崩れていきます。聖書はその主たる原因を、人間による自由の濫用に求めます。楽園で神から禁じられた一本の木の実を食べて、楽園から追放されます（創世3章）。兄弟を恣意的な理由で暴力的に殺害したカインは、自分の働きの場である農地から追放されて流離う者となります（創世4章）。そして暴虐と不正が蔓延したために、洪水に呑み込まれ、世界は人間とあらゆる生き物にとって居所ではなくなってしまいます（創世6～9章）。

この一連の物語は私たちが生きている現実の世界がどのようなもので

あり、どのようにしてそれが生じたかを説明しようとしています。つまり、本来人間というものは、自分にふさわしい生き方、つまり神から与えられた人間としての道を踏み外さないように歩んでいけば、創られたときの理想の姿を保つことができるはずだ、ということです。それを現代の用語で言えば、人間本来の生き方を選ぶことによって完全な自己実現を獲得できるはずだ、ということです。人間が自分にふさわしい道をわざわざ踏み外すので、さまざまな困難にぶつかったり、傷を負ったりしてしまいます。ですから、世界が墮落するのは、神々の気ままな振る舞いによるのでも、悪魔の悪意によるのでもなくて、ひとえに人間の責任だ、というのが聖書の強調するところです。そういう自由の濫用、つまり人間に本来備わっている理想の生き方から離れた行動やそれが生み出す状態を、聖書では「罪」と名付けます。

新約聖書の中には福音書と言われる、四つのイエスの伝記が伝わっています。その中でイエスは、奇跡を起こす者として出てきますが、中でも、病を癒すという奇跡が非常に多いですね。しかし福音書はイエスを魔術師や霊能者としては描きません。そうではなくて、病を癒やすことによって人間の本来の姿を回復させる者として描きます。病によって表されている人間の状態は、何かが傷ついた状態、何かがうまくいっていない状態です。そのような人間を本来あるべき姿に戻す、人間性を完全さへと導くのがイエスです。その意味で福音書の中で病気にもその治癒にも象徴的な意味があります。

そのような背景があるため聖書には病気がしばしば出て参ります。その中から、二つのエピソードをご紹介しますと思います。一つは「ナアマンの癒し」という物語で、列王記と呼ばれる書物の中に出てきます。それからもう一つは新約聖書から、シモンの姑の病をイエスが癒した話です。

## 列王記下 5 章 1 ～19 節

まず列王記下巻 5 章の 1 ～19 節の物語を読んでみましょう。ナアマンが重い皮膚病にかかって、そこから癒される、そういう話です。この話は非常に大きな話で、これはその前半部分にあたります。後半部分の主

人公であるゲハジは物欲にかられてナアマンがもってきた金銀財宝からくすね取ったために、師匠の預言者エリシャから罰せられ、ナアマンが癒されたその病を身に被るという結果を招きます。民話でいえば「花さか爺さん」や「舌切り雀」に登場するような、よい人と悪人が対比される物語です。ここではナアマンが癒される部分を、要約しながら読んでいきたいと思います。

物語はこう始まります。「アラムの王、軍司令官ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた」。このアラムというのは、現在のシリアの地域です。首都はダマスкас（ダマスコ）で、物語の舞台となる時代は紀元前8世紀ころです。アラムはイスラエル王国の隣国であり、イスラエル王国に比べればはるかに強い軍事力・経済力を誇る国でした。古代イスラエルの人々の国は、シリアの軍勢にさんざん苦しめられていました。ナアマンは、そういう強敵の軍の総司令官であり、軍略にも長けていました。「主が彼を用いて、アラムに勝利を与えられた」と語り手はコメントを加えています。

ところが、この人は勇士、英雄であると同時に、重い皮膚病をわずらっていました。この病気は、先ほど言いましたように皮膚病の一種で、祭儀的な清さを失わせる病気です。ですからナアマンは、王に次ぐ高位にある国家の実力者でありながら、祭儀という国家の最も大切な行事に参加できない、という矛盾を抱えた状態にあったのです。国家の中枢にいなながら、国家行事の一番大事なものに参与できないという状態です。この状態から癒され完全な状態を回復した時にナアマンに何が起こるのか、ということがこの物語の鍵になります。

さてアラムとイスラエルの戦いで捕虜になってアラムに連れてこられていた少女が、ナアマンの妻の召使いになっていました。その少女がナアマンの病気を癒す方法を教えます。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに」。サマリアはイスラエル王国の都です。そこにいる預言者がナアマンを思い皮膚病から清めることができると告げます。預言者は未来を予告する「予言者」と異なり、神の言葉を預かっている者、つまり神の権威をもっている者を意味します。この病を癒すのは、医者など人間的技術によってではなく、神と直接結ばれ神の力を仲介する特別なカリスマ的

人物によってである、ということが言われます。

それでナアマンは主君のもとへ行き、旅行の許可を願います。できごととは非常にスムーズに進みます。アラムの王は許可するだけでなく、イスラエルの王に手紙を書いて、病気の治療を依頼することにします。「こうしてナアマンは銀十キカル、金六千シェケル、着替えの服十着を携えて出かけた」。

ナアマンは金銀財宝をもって行きます。一キカルは 34.2 キログラムとされていますので、銀十キカルは 342 キログラム、現在の相場で 7600 万円くらいでしょうか。他方シェケルは 11.4 グラムですので、金六千シェケルは 68.4 キログラム、時価 3 億くらいでしょうか。そして着替えの服と言われていますが、これは晴れ着のことです。豪華な刺繍がほどこされた、それこそ王様や高貴な人が着る服を指します。ですから要するに、ナアマンは莫大な金額の財宝を携えて旅立った、ということになります。

イスラエルの王はアラムの王がしたためた手紙を読んで恐怖心にかれます。手紙にはこう書かれていました。「今、この手紙をお届けするとともに、家臣ナアマンを送り、あなたに託します。彼の重い皮膚病をいやしてくださいますように」。イスラエルの王はアラムとの戦いに敗れた後でもあり、アラム王が無理難題をふっかけてイスラエル王国を殲滅する戦争のきっかけを探りに来たと誤解したのでしょう。衣を裂いて、つまり深い悲嘆を表す行為とともに、次のように言います。「わたしが人を殺したり生かしたりする神だとでも言うのか。この人は皮膚病の男を送りつけて癒せという。よく考えてみよ。彼は私に言いがかりをつけようとしているのだ」。

イスラエルの王の発言は正しいところもあります。ナアマンの病は神によってのみ癒される病であり、たとえ王といえども神ではなく、この病を癒すことはできないのです。しかし誤解も含んでいます。アラムの強大な軍事力を前にして、イスラエルの王は疑心暗鬼にかられています。アラムの王は謀略のためにナアマンを旅立たせたのではありませんでした。しかしそれはイスラエルの王には伝わりません。軍事的な対立がナアマンの病を癒す道を閉ざそうとしています。この障害を取り除くのがエリシャです。「神の人エリシャはイスラエルの王が衣を裂いたことを聞き、王のもとに人を遣わして言った。『なぜあなたは衣を裂いたりしたの

ですか。その男をわたしのところによこしてください。彼はイスラエルに預言者がいることを知るでしょう』」。

こうしてナアマンは癒しの可能性へと近づいていきます。「ナアマンは数頭の馬と共に洗車に乗ってエリシャの家に来て、その入り口に立った」。ナアマンは馬と戦車に乗って威風堂々とやって来るわけです。ところがエリシャは直接会おうとしません。使いの者を出してこう言わせます。「ヨルダン川に行つて七度身を洗いなさい、そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります」。アラムの軍総司令官が来ているのに会おうともしない。その失礼にナアマンは怒り、踵を返して国に帰ろうとします。このままではナアマンは癒されないままになります。ナアマンを癒してから遠ざける障害は、この場面ではナアマン自身、ナアマンの傲慢さにあります。幸いナアマンは家来たちの忠言に耳を傾ける度量を備えた人物でした。家来たちは巧妙にナアマンの自尊心をくすぐりつつ、ナアマンを癒しへと導きます。「わが父よ、あの預言者が大変なことをあなたに命じたとしても、あなたはそれとおりなさったにちがひありません。あの預言者は『身を洗え、そうすれば清くなる』と言っただけではありませんか」。

「わが父よ」という呼びかけは自分をへりくだり、相手を尊敬する敬語表現です。しかし同じく目上の人に向かって使う通常の尊敬語「ご主人様」と比べると、家族関係になぞらえた親しみを込めた言い方です。親身になって忠告する家来たちをナアマンはもっていたのです。また、目下の者の心からの忠言に耳を傾けるときに、病の癒しの障害は取り除かれます。「ナアマンは神の人の言葉どおりに下って行つて、ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった」。ナアマンが望んでいた癒しが実現したのですから、ここで物語は終わると思われるかもしれませんが。しかし語り手はさらに語り続けます。

病が癒されたナアマンはすぐに神の人エリシャのところに戻つて来て、その前に立ち、「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今このしもべからの贈り物をお受け取りください」と言います。しかしエリシャは断固拒否します。「私の仕えている主は生きておられる。私は受け取らない」。この「主は生きておられる」という

のは誓いの言葉です。神は生きておられて、人間の誤った行動を必ず処罰するかたであるから、私は決して受け取らない、という意味です。「神に誓って受け取りません」と、固い意志を表す表現です。

ナアマンは、エリシャがどうしても受け取ってくれないので、代わりに自分が贈り物をもらって帰ることを提案します。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこのしもべにください」。それは、この土を故郷に持って帰って、主にのみ、ささげものをするためです。「主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることはしません」。

それに付け加えて、もう一つのことをナアマンは頼みます。故郷に帰ると、自分は王に仕える身であるから、国家の行事に必ず参加しなければならない。王がアラム人の神、リモンの神殿に行って礼拝するとき、自分は王の介添えをして神殿でひれ伏さなければならないが、それを許可してもらえるだろうか、という願いです。これらの二つの願いに対してエリシャの答えは非常に寛大です。「安心して行きなさい」。

「安心」と訳されている語は〈シャローム〉です。平和とも訳されることがありますが、平和は単に紛争がない、戦争がない状態というばかりでなく、すべてが満たされている状態です。欠けたところがない、傷がない状態、それが〈シャローム〉です。神との関係も人間との関係もすべて満たされ、誰に対しても負債が無く、誰からも恨まれていない。さらには自己自身ともよい関係にある状態です。

ここでのナアマンの姿が、病が癒されるということの意味を私たちに教えてくれます。単に病気が治るだけの話でしたら、ヨルダン川に七度身を浸し、体を洗って清くなったところで物語は終わっていたはずですが。物語はナアマンが病を癒され、清くなり、小さな子供のようになり、元の体にもどったことを描き出そうとして、病気の治癒の後の生まれ変わったナアマンを描きます。そしてそれが「シャローム」の状態、満たされた状態であることを読者に知らせようとしているのです。

## ナアマンの身に起こった変化

ではナアマンに、いったいどのような変化が起こったのでしょうか。

物語をもう一度振り返ってみますと、ナアマンを描き出す様々なキーワードの相互の関連に気がきます。

物語前半の、病が癒される前には、ナアマンに関連するキーワードとして主君に「重んじられ」ていた、あるいは金銀財宝つまり「銀 10 キカル、金 6000 シェケル、着替えの服」、「家臣」、「馬」、「戦車」、などなどがありますが、これが病気が治った後でどういう言葉に変わるでしょうか。その対応を見てみましょう。

ナアマンがサマリアに向かって旅立つにあたって大量の金銀や豪華な服を携えていったことの目的は、物語の中で直接説明されてはいません。しかし私たち読者には想像可能です。財力にもものを言わせてエリシャが癒やしを断れないようにするためです。これだけの報酬をちらつかせれば断るような人間はいないだろうと思っているわけです。この傲慢で強圧的な態度は、エリシャからの指示に反発して立ち去ろうとしたときにナアマンが発した言葉にも如実に表れています。エリシャの方が腰を低くして近づき、私の思い通りに病をいやしてくれるものと思っていたのに、顔を見せることもなく、代わりの者に指示を伝えるだけ。こんなに軽く扱われては自分の面子は丸つぶれだ、と怒ったのでした。

さてナアマンが携えてきた金銀財宝は、病が癒やされた後にもう一度出てきます。つまりナアマンがエリシャに「贈り物」として受け取って欲しいと頼むところです。贈り物とは本来、贈ることが目的のものです。アラムを出発したときの表現と明らかに対比があります。物語の語り手は、そこでは、携えていく目的を言わずに、あたかもむき出しの金銀財宝を読者に見せつけるかのように、品目と分量だけを詳しく叙述します。同じ品物でありながら、癒やされた後は贈り物とされます。つまり癒やしによって、以前のむき出しの支配欲、物質的な力や権力によってエリシャを支配しようとする傲慢なナアマンが姿を消し、感謝のしるしとして受け取るよう懇願する謙虚なナアマンに変化しているのです。それは言い換えれば、物質的な利益をちらつかせて病を癒やさせようとするのは「取引き」を持ちかけているのですが、癒やされた後のナアマンにとって同じ品物がもはや人と取引きの関係を結ぶ手段ではなく、感謝という人間らしい心の表現の手段に変わったことになります。

このような変化をいくつも指摘することができます。ナアマンはエリ

シャに向かって自分を「しもべ」と表現します。「このしもべからの贈り物をお受け取りください」と。自分の思い通りにしてくれないエリシャに対して怒ったナアマンとは正反対に、エリシャを目上として尊敬し、エリシャの意志を自分の望みよりも優先するという謙遜なナアマンとなっているのです。

ナアマンが携えてきた品物をエリシャは受け取ることを拒絶します。そこでナアマンは逆に、自分に贈り物をくださるようにと願います。力づくで支配するナアマンは姿を消し、懇願することができる人間になっています。しかもエリシャに頼む「贈り物」とはらば2匹に背負わせるだけの土です。土とは金銀財宝の対局にあるもので、どこにでもある取り立てて物質的価値のないものです。しかしこの土はナアマンにとって特別な意味をもっています。「イスラエルの神の他にはささげものをしません」と言っているのです、ナアマンはこの土を使って祭壇を作り、イスラエルの神への供え物をするつもりで願っていることが分かります。ナアマンにとってイスラエルの地から持って帰る土は、そこで病気が癒やされ、神と出会った貴重な経験を象徴する存在です。また、この土を運ぶ動物はらばです。らばは農民が普通に使用する家畜です。癒やされた後のナアマンはその前と同様馬と戦車に乗っているはずですが、物語の語り手はそれに全く言及せず、らばという動物だけに読者の注意を集めるように語り、対比を形成します。馬や戦車が王侯貴族にだけ所有が可能な経済的・軍事的権力を象徴するものですから、癒やされた後のナアマンと結ばれるらばは、ナアマン自身の変化を象徴していることになります。権力による支配に頼って生きるナアマンが癒やされ、自分にとって価値のある体験の記憶に基づいて生きるという謙遜なナアマンへと変わったことが表されているのです。

さらに、病が癒やされる前と後との両方に出てくる表現として「前に立つ」があります。エリシャが腰を低くして、いわば「どうか病気を癒やさせてください」とでも言ってくるだろうと思っていたところが、エリシャはまるで正反対の態度に出ました。それを怒ったナアマンに、物語の語り手は、「彼自身が出てきて私の前に立ち」病を癒やしてくれるものと思っていた、と発言させています。「前に立つ」とはしもべや家来が主人、主君の面前に控えていて、命令を待つときの態度です。支配者は

座席についています。王ならば王座に座って、その前に立っている家臣たちに命令を下します。「前に立つ」という表現は誰が支配者で誰がそれに服従する者であることを明示する表現です。この言葉が、病が癒やされた後にも出てきます。「彼は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った」。ナアマンがエリシャの前に立つのですから、上下の関係が以前とは逆転していることが読み取れます。エリシャが自分の前に立たないのを怒っていたナアマンが、癒やしの後では、自らがエリシャの前に立つようになっているのですから。

それと同時に、ナアマンの周囲の人々の表記も変化しています。以前には「彼の家来たち」がナアマンに付き従っていたのですが、癒やされた後でこの家来たちが「随員」と言い換えられています。翻訳はそれほど正確にはなされていませんが、随員と翻訳されているもとの語は、隊商を組んで旅をする仲間を意味する語です。支配・被支配の人間関係の頂点に君臨して生きていたナアマンでしたが、旅の苦労を共にする仲間、助け合って生きる共同体の一員として生きるナアマンへと変化しています。そしてこのように変化したナアマンに対してなら、エリシャは直接会ってもよいと思えたのでしょう。癒やされる前には一度も直接言葉を交わしたことはありませんでしたが、今はエリシャとナアマンの間に顔と顔をつきあわせての直接対話が成立しています。

ここまで見てきたナアマンの変化をまとめますと、物質的力つまり財力や軍事力などの権力に依拠して支配することによって生きるナアマンから、懇願することのできるナアマンつまり人の自由意志を尊重し、共に支え合って生きる共同体の一員として生きるナアマンへと変化しています。同じく物質的に依拠するナアマンは姿を消し、自己にとって意義深い体験の記憶に基づいて生きるナアマンへと変化しています。これが重い皮膚病が癒やされたことが意味する変化の本質です。イスラエルの他に神はいないという認識に達した人間の本質です。物語の語り手は、この変化を総括しその本質を指し示すキーワードも与えています。それは「大きい」、「小さい」というキーワードです。大きいナアマンは、アラムの王に「重んじられ」、エリシャが「大変なことを命じたとしても」平気なはずのナアマンです。このナアマンが小さくなるとき、また捕虜としてアラムに連れてこられたイスラエルの少女や自分の家来たちとい

う身分の低い、小さい人々の言うことに耳を傾けると、癒やしへと近づきます。「小さい」というキーワードは傲慢なナアマン、大きいナアマンとの対比となるキーワードです。

語り手は「小さい」というキーワードを、病の癒やしの場面で読者に提示します。そうすることによって、ナアマンに生じた変化の本質を読者に注目させています。「ナアマンは（中略）ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体のようになり、清くなった」。ここで、「元に戻る」、「清くなる」というキーワードは、エリシャが前もって告げたことです。エリシャはこう言っています。「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります」。しかしエリシャの言葉には「小さい子供のようになる」ということは言われていませんでした。預言者エリシャが予告したことに対し、語り手が付け加えていることになります。いわば余剰の情報を語り手が提供しているのですが、それに気づくなら、「小さい」あるいは「大小」が物語の意味を総括するキーワードであることを語り手が読者に知らせているのだと理解できます。大きいナアマンが小さいナアマンに変化したことが病の癒やしの本質であるということです。そして「小さい子供になる」とは「元に戻る」つまり、人間が創られたときの本来の理想的あり方が回復することだ、と言っているのです。古代の社会にあっては、そして現在の私たちの社会でもほぼ同様でしょうが、権力を持っている人間だけが人間であり、子供はその対極に位置していますから、一人前の人間には数えられません。社会の中心は権力者が占めていて、小さい人々は周辺へと追いやられ、顧みられません。しかし謙遜な人々、小さな人々こそが本来の人間であり社会の中心にあるのです。イエスが「小さい子供のようにならなければ神の国に入れない」と言ったのも、この意味でしょう。

ナアマンがかかっていた「重い皮膚病」は、ただ単に医学の対象となる病気というのではなく、むしろナアマン自身のあり方に関わる象徴的なものであったのです。ナアマンは根本的なところが傷ついていた人間、何かが欠けていた人間であり、それが癒やされ、満たされ、人間としての本来の完全なあり方に戻った、というのがこの物語の中の「癒し」です。そういうふうに考えれば、たとえ病気が治らないとしても、人間ら

しくなる可能性がある、ということにもなります。そもそも病気が治らなければ、人間は人間に戻れないのでしょうか。病気のない健康状態になれば人間とは言えないのでしょうか。もしもそうだとすれば、薬もなく、医療も発達していない時代に生き、病気で死んだ人は惨めな人間ということになってしまいます。しかし人間は、病気がないから人間なのではなくて、病気であっても人間らしくなれるのです。ナアマンの物語の中で病気が象徴的に表しているのは、人間にとって本質的・根本的な価値あるものが傷ついている状態のことです。根本的な癒やしがあれば、病気であっても健康でいられるわけです。

## マルコ福音書 1 章 21－31 節

時間が来ましたので、新約聖書の中の癒やしの物語については簡単にお話しします。福音書の中でもっともささやかな奇跡と言われる話をご紹介します。

それはマルコ福音書 1 章の 21 節から 31 節までのエピソードです。悪霊にとりつかれた人が癒されたエピソードに続いて、こう物語られています。「すぐに一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒にあった。シモンの姑が熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした」。

要約すると、シモンの姑が発熱の病気にかかり、イエスがそれを癒やし、起き上がった彼女は一同をもてなした、という非常に簡潔な内容です。わざわざ奇跡を起こすまでもなく、しばらく寝るだけで十分治る病ではなかったのか、という印象さえ与えます。それほど些細なできごとであったので、福音書の中で最もささやかな奇跡、と呼ばれているわけです。

このようなささやかな奇跡に比べれば、死者を蘇らせるという奇跡こそ、奇跡らしい奇跡なのかもしれません。同じくマルコ福音書の 5 章にそのようなできごとが物語られていて、そこでは病気で死亡した少女をイエスが蘇らせたとされています。これら二つのエピソードは正反対であり、まるで共通点などないかのように思われるかもしれませんが、実

際は、いくつかのキーワードが二つの箇所で共通です。それをいくつか挙げてみましょう。

その前に、マルコ福音書5章のエピソードを要約してみますと、この死者を蘇らせる奇跡の場面でイエスは、両親と三人の弟子、つまりペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、死んだ少女が横たわっている部屋に入り、少女の手をとって、「タリタ、クム」と語りかけます。これはアラマイ語で、「少女よ、起きなさい」という意味です。すると少女はすぐに起き上がって歩きだします。ここで名前が挙げられる弟子、つまりシモン（ペトロ）とヤコブとヨハネがそろって出て来るエピソードは少なく、しかも福音書で重要なできごとが物語られるところに限られます。マルコ福音書5章のエピソードで語り手は、死者の蘇りという重要なできごとの目撃者が「ペトロ、ヤコブ、ヨハネだけ」に限られていたことを言って、できごとの重要性を強調しているのです。

以上をマルコ福音書1章のシモンの姑の癒やしのエピソードと比べてみましょう。するとすぐに気づくことは、同じ3人の弟子の名前が両方に言及されている、ということです。シモン（ペトロ）の姑の発熱を癒やすエピソードにも、あと二人の弟子の名前、つまりヤコブとヨハネが紹介されているのです。

また、イエスが死んだ少女を蘇らせるとき、イエスは「子供の手を取って」います。同じ動作をシモンの姑にもしています。さらに、イエスが「クム（起きなさい）」と命じると、「少女はすぐに起き上がり」ます。同じようにイエスが手を取って「起こした」のでシモンの姑の熱は去ります。そして蘇った少女は自分で歩き、熱が去った姑は自ら働いて一同をもてなします。さらに興味深いのは最後の点です。つまり、姑が一同に食事を提供してもてなしたことは、蘇った少女のために「食べ物を与えるように」とイエスが言ったことと対応しています。

この様に福音書の語り手（マルコ）は、もっともささやかな奇跡のなかに、死者を蘇らせる奇跡が意味することと同じ重要な意味が潜んでいる、ということを読者に読み取らせようとしているのです。キーワードの繋がりは、姑の癒やしのエピソードを読む時点では気づくことはできませんが、しばらくして物語られる少女の復活のエピソードを読むときに、前のエピソードの記憶が読者に蘇り、キーワードの繋がりに気づく

ことになります。ささやかなできごとと思っていた姑の癒やしのエピソードが、少女の復活のエピソードに匹敵する重要性を帯びて、再び思い起こされるのです。

では、死者の蘇りという最もめざましい奇跡と、発熱が治るというささやかな奇跡とが共通のキーワードやできごとから成り立っているとすれば、それは何を意味しているのでしょうか。

その答は「一同をもてなした」ということにあると思います。癒やされる前に姑は、発熱のため身動きがとれなかったのです。病は人間を傷つけ、動けないようにします。人間が持っている本来の能力を発揮する可能性を奪います。病から癒やされるときに、人間は本来の姿を回復し、動けるようになります。癒やされた姑がしたことは、人間本来の姿を象徴的に表現しているのです。一同をもてなすとは、持てるものを分かち合い、喜びを共有することです。持ち物を与えることによって、人々に歓びを与えることです。

この「与える」ということは、先に読みましたナアマンの癒やしの物語とも共通のテーマです。ナアマンの癒やしにおいても姑の癒やしの場合も、できごとの本質は病気自体の治癒に限定されていません。むしろ病気が癒やされた後の行動にこそ物語の主眼があります。病気が去った後に如何に生きるか、という問こそが、癒やしの奇跡の物語が読者に問いかける問なのです。また病気から癒やされた人間の行動を描くことによって人間本来の姿を読者に伝えることが、この奇跡物語のメッセージです。

ですから私たちが病気に罹るとしても、人間本来のかけがえのない心だけはしっかりと保ちたいものです。病気は病人を病床に縛り付け動けなくしてしまいます。与えることが人間の本来の姿であるのに、その力も可能性も制限されます。それでも病気に負けない気力と望みは失わないようにしたいと思います。たとえ動けなくなっても、何か良いことをしよう、何かを分かち合おう、という望みを持ち続ける限り、人間らしさを保ち続けることができます。そうであればどんな病気も人間の心までも蝕むことはできません。そのような心を持ち続ける限り、身体的には動けなくなり、口がきけなくなり、足が利かなくなったとしても、人間は人間であり続けることができます。このようにできごとを見るなら

ば、ささやかな日常のできごと、奇跡とは見えないできごとにおいても、「死からの蘇り」という奇跡が潜んでいると言えるのです。

時間をかなりオーバーしてしまいましたが、これで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

(付記：本稿は2013年9月7日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講座を文章化したものです。)